

日本・カトリック
三〇年代前半の苦悩

和田洋一

- 一、プロテスタント対カトリック
- 二、上智大の靖国参拝拒否事件
- 三、私人の精神状況
- 四、カトリックもだめだった
- 五、参拝拒否事件そのもの
- 六、全日本教区長の共同教書
- 七、どのような反省が？

一 プロテスタント対カトリック

日本のプロテスタントの出版活動とカトリックのそれとを比較した場合、明治・大正・昭和を通じてカトリック側

の劣勢は明白である。一五年戦争の期間、カトリック教会はどのように生きたか、どのように戦争に対応したか、そして戦後どのような反省を行なったかを、カトリックの出版物を通して知ろうとしても、困難は一通りや二通りではない。プロテスタント側の文献の量とくらべてみて、カトリック側のそれはあまりにも貧弱である。

一九三〇年代のプロテスタントの人口は二〇万、カトリックは一〇万と称せられていた。戦後、一九六〇年代にはプロテスタント四四万、カトリック三三万と報告されたこともある。しかし出版物の割合は、二対一、四対三というようなものではない。特に一五年戦争に深いかかわりをもつ出版物の割合は、一〇対一にもならないのではないかと思われる。カトリック教会にとってあの戦争は、一五年間荒れつづけた台風、つまり自然現象であって、戦争がすんでから振り返ってみてもたいして意味がない、そういうことなのだろうかと思ってみたりする。

『あるキリスト者の戦争体験』という書物をかいた安藤肇はプロテスタントの牧師である。『キリスト教の戦争責任』の著者森岡巖・笠原芳光もプロテスタントであり、二人ともカトリックの戦争責任を視野の中においていない。毎年発行される『キリスト教年鑑』はプロテスタント年鑑であって、カトリックについて調べようとする場合役に立たない。『日本キリスト教百年史』（海老沢亮著）は、アメリカ人ヘボンが日本宣教をめざして渡来した年から、数えての百年史であるから、日本プロテスタント教百年史であることは当然である。一五年戦争の前半の時期に迫害を受けたカトリックに関しては、ほんの五・六行触れられているに過ぎない。海老沢有道執筆の「日本カトリック史」と大内三郎執筆の「日本プロテスタント史」の両篇から成立している『日本キリスト教史』は、出版社がプロテスタント側であるだけに、注目される。ページ数の割合が、カトリック一、プロテスタント四、は今問題にしないとして、プロテスタント教史担当の大内が、「戦争とキリスト教」という一章を設けて、一五年戦争下のプロテスタントについて

叙述しているのに対して、カトリック教史担当の海老沢が、キリシタン時代に力を入れすぎたためか、大正・昭和時代に全く触れえなかったのは残念であった。一五年戦争下のカトリックについて知ろうとする私の意欲は、そのことによって逆に刺げきされたということもないではない。

久山康篇『近代日本とキリスト教』は、『明治篇』と『大正・昭和篇』の二冊に分れており、座談会の記録である。座談は、圧倒的に近代日本とプロテスタント教ないしプロテスタント教徒をめぐって行なわれたといっている。ただ、カトリックを全く無視してはいけないという配慮もあって、『大正・昭和篇』では「大正・昭和期におけるカトリックの発展」というテーマが司会者から提出された。しかし座談会出席者（プロテスタント七名、非キリスト教徒三名）は何分にもカトリックの事情にわろわろい人ばかりだったので、話に花が咲くはずはなかった。座談会の司会者兼進行係をつとめた久山は、あらかじめ『カトリック大辞典』第四巻の日本・カトリックの部分、その他いくつかの資料を学習してきていて、一通りの説明をこころみた。そして大正・昭和期におけるカトリックの発展に関して次のような感想をつけ加えた。

「プロテスタントの動きに較べると誠に静かな発展の仕方、しやくとて駒を中原に進める概があります、しかしプロテスタント以上に外国依存的で、日本人の自主性には乏しく、日本の精神史の主流との交渉対決は殆んどみられないのは淋しい気もしてなりません。」

「これは精神的に最も活発な都市の中産層・知識階級とカトリックとが結びつかなかったことに原因しているでしょうし……」

久山のこのような発言に対しておそらく誰も異存はなかったのであろう。討論は発展せず、静かに簡単におわって

しまった。そしてテーマは次の「戦時下のキリスト教」に移っていったのであるが、ここでは戦時下のプロテスタントの動きに関して、報告・解説・意見が次つきと出され、印刷ページにして三〇ページのながい座談となった。戦時下カトリックに関しては、出席者の誰もが語るべき材料をもっていなかった。一九三二年（昭和七年）に起った上智大学、暁星中学校の靖国神社参拝拒否事件について、久山がわずかに触れただけである。しかしこの事件がきっかけとなって、カトリック全日本教区長の「共同教書」が発表され、以後、カトリック教徒は、靖国神社、その他戦没者に対する式典等に「進んで愛国心と忠誠とを現わす」ようになったのである。そしてそのため、軍国主義者、超国家主義者のあいだでカトリックの評判は、プロテスタントとくらべて、いくらかよくなったのである。

二 上智大の靖国参拝拒否事件

先に引合いに出した『日本キリスト教百年史』の著者海老沢亮は、「一九三五年四月、カトリック全国教区長会議は共同教書を発し、日本主義、転向を声明」（傍点和田）という風にかいている。『カトリック大辞典』第四巻は、上智大学、暁星中学校の問題には、簡単に触れているが、共同教書については、ひとことものをべていない。共同教書の発表は、非常に苦しい立場に追こまれたカトリック教会が、心ならずもおこなった行為であって、歴史に遺したくなかったであろう、という推測を私としてせざるをえないが、しかしこれは戦時下のカトリックの運命を決定したといっているほどの行為であって、歴史から抹殺することはとうていできない。

上智大学、暁星中学校の靖国神社参拝拒否事件は、日本全体の大きな流れから見れば、特にとりあげる必要のない

小さな事件であつただろう。しかしこれは単にカトリック内部の出来事ではなかつた。三年後にはプロテスタント系同志社高商の神棚事件という別の形をとつて、軍部のキリスト教に対する威嚇が表面化するのであつて、戦時下のキリスト教（プロテスタント教だけではなくキリスト教全体）について、また靖国神社問題について、信教自由の問題について考える者にとつて、それは忘れることの許されない事件である。

上智大学に事件が起つてゐるらしいことを新聞が知らせてくれたのは、一九三二年（昭和七年）の秋であつた。最初に記事にしたのは一〇月一日の報知新聞だつたといわれているが、すべての新聞がこの事件に力を入れ、争つて記事をかいたわけではなかつた。当時の上智大学は現在の上智大学とはちがつて、学生数わずかに二百数十名、著名な教授がいるわけでもなく、存在がほとんど認められていない弱小大学であつたということが一つ、つぎに上智大学の学生が靖国神社の前で頭をさげなかつたということが噂になつてひろまることは軍人、右翼を刺げきし、好ましくないとこの判断から学校当局が極力秘密主義を守つたと思われる、ということ、第三に、学長がドイツ人であり、その他主だつた教授はいずれも外人でありいずれも黒い僧服をまとつた司祭であり、学内の一角に共同生活をしているという特殊事情もあつて、新聞記者のインタビューが非常に困難であつたということも考えられる。記事にするとすれば軍部のごきげんを損じないようにかかなければならぬし、弱小カトリック大学をいたわる気持が新聞社側にあつたとも感じられる。新聞は、はではには扱わなかつたが、しかし当時、プロテスタント系の同志社大学でドイツ語教師をつとめていた私は、この事件に強い関心を抱いていた。対岸の火災ではあつたけれども、火の手は何時こちらの岸へ移ってくるかわからないという不安があり、それ以外に私の個人的な理由もつけ加わつてゐた。私の個人的体験と私の当時の精神状況をここで語ることをお許し願いたい。

三 私個人の精神状況

私は、一九三〇（昭和五年）三月に大学を卒業した。失業という言葉が絶えず耳にはいつてくる時期に、同志社大に職を得たということは大きな幸運であったが、にもかかわらず私の念頭から去らなかつた不安は、第二次世界大戦は近いうちにかかるのかどうかということ、それにつづいて、私自身が兵隊に狩り出されるような事態がくるのかどうかということであった。私は、日本軍の中国山東省への第二次、第三次出兵に無気味なものを感じ、軍部に対する反感を強め、電信柱に書きつけられた文字「大陸侵略反対」に感動したりしていたが、そのような感情と思想とは私が幼い時から受けつづけてきたキリスト教の教えと、大学生となつてから接触したマルクス主義の影響と、両方がごっちゃまぜになつたものであつた。旧制高校時代に京都の下鴨神社へ出かけ、同行の友人がうやうやしく頭をさげたのに私がさげなかつたので、神主がつかつかと寄つてきて「君は何故頭をさげないのか」と詰問したことがあつたが、それよりもっと前、中学生の時、天皇陛下の馬車を帽子をぬがないまま見送つていて、行列が過ぎ去つたあと、見知らぬ男から「君は何故帽子をぬがないのか」とにらみつけられ、逃げ出したこともある。これらはすべてキリスト教の影響だつたのであろう。日本の国だけを愛するせまい愛国心にとらわれなかつたのも、天皇への忠義を本気で考えたことがなかつたのも、私の場合、キリスト教以外のものからの影響は考えられない。一九三〇年代前半頃のマルクス主義者は、キリスト教の反動性を批判し弾劾したが、キリスト教が私の内部に育てた「非国民的」思想感情を、さらに強化する役割を演じたのがまたマルクス主義であつた。

第一次世界大戦がおわって、世界に平和が到来した頃、私はまだ少年であったが、あのような残虐な戦争、あのような愚かな殺し合いを、人類は二度と再びくり返してはならない、と多くの人がさげんだのを、何度も耳にした。日本のクリスチャンは、みんな平和主義者になったようにも見えた。しかし三〇年代にはいって、新たな戦争の危険がせまってくると、クリスチャンをも含めて、人びとは平和について語ることをさし控えるようになった。私は青年として不信感をもたずにはいられなかった。平和は、平和が強くおびやかされている時にこそさげねばならないのではないか。キリスト教というものがひどく無力なものに感じられ、牧師先生の説教を聞いても、いらいらすることが多くなった。

そうした時期に、旧制高校らしいの親友で熱心なカトリック教徒で、後に名古屋の八高・名大の教授になった水川温二が私につきのようなことを語った。

「カトリック教徒は、小学生にいたるまで、伊勢神宮の前でうやうやく頭をさげたりはしない。引卒者である先生に後から頭をおされてもさげない。カトリックはそういう教育をしている。われわれのカトリック教会は、その点は、はっきりしているのだ。」

私は衝撃を受けた。聖書には、偶像礼拝をしてはならないと書かれている。京都市内の小学校はすべて、卒業式の直前に六年生の生徒を全部伊勢へつれていって、神宮に参拝させることを毎年の例にしているが、プロテスタント教会は、子供たちに頭をさげてはいけないというような教育はしていない。私は、はっきりしているカトリック教会と、はっきりしていないプロテスタントとのちがいを指摘され、まいってしまった。カトリックはあっぱれだと思っただが、しかし次のしゅんかん、しだいに陰悪になっていくご時勢の中で、カトリック教会が姿勢をくずさないとすれ

ば、必ずや信徒たちは迫害され、おびただしい血が流されることになるだろう。三百年前の切支丹の大量的殉教の再現、それはあまりにも怖ろしいことだ、私はかすかながら寒けのようなものを感じた。

そのあと何か月かのちに上智大学、暁星中学校の事件が起ったのである。プロテスタント系の学校だったら、軍の圧力におされて、うやむやのうちに妥協して引きさがるであらうことは簡単に予測できた。しかしカトリック系の場合はことによると徹底抗戦をやるかもわからないし、やればそれは壮烈な戦いであるが、しかし相手はあまりにも強力である。軍人は満州事変をひき起したあと、いよいよ調子づいており、大学を一つや二つぶつぶすぐらい何とも思っていないだろう。右翼団体も必ずや上智大学とカトリック教会に攻撃をかけるだろう。私は、期待と不安にみたされながら、時たま出る事件関係の新聞記事に目をみはっていたのである。

四 カトリックもだめだった

先へのべた報知新聞の記事は、『新聞集成昭和編年史』（昭和七年度版）の中に再録されている。それは「今春、滿蒙上海事変戦没の将士を合祀のため举行された靖国神社の大祭に、都下各学校生徒が軍事教官や担任の先生に引卒されて護国の英霊として衷心より神前に参拝した中に、麹町区内のカトリック派の某学校（特に校名を秘す）学生や同派の信者に属する一部が、軍事教官の命を拒否して頑として礼拝せず……陸軍省派遣の軍事教官が学校当局に対し詰問したが煮え切らぬので、陸軍省に報告したので軍部の人々も伝へ聞いて激昂……」という記事で、かなりあいまい不確かな部分がある。校名を秘したのは上智大学ないし暁星中学校をかばう意味だったのであろうが、礼拝しなかった

学生は数名だったのか数十名だったのか、「同派の信者に属する一部」というのは上智大学の職員を意味しているのか、学生は始めから靖国神社に行くことを拒んだのか、それとも境内にははいつて拜殿の前で頭をさげなかったのか、学校当局が煮え切らないというのは、どういう風に煮え切らなかったのか、事件発生後すでに半年近くたっているのだから、新聞社として今すこし調査をかつちりして記事を作成すべきだったと思われるのであるが、報知以外の新聞の記事、『朝日年鑑』、『毎日年鑑』の記事も同様はつきりしていない。日本基督教連盟発行の『基督教年鑑』は、カトリックのことは関係ないという態度であり、一九六三年（昭和三八年）に刊行された『上智大学五十年史』も報知新聞の記事を引用しているだけで、正確な知識をそこからえることはできない。『日本カトリック新聞』は週刊でブランドケット版、毎号四ページで、この新聞こそカトリック教会の機関紙として報道し解説し論評しているかと思われるが、カトリック大学の存亡に関するこの事件について、一行の記事も掲載することをしていない。三三年三月にはホフマン学長自ら陸軍省を訪れ、いったん引揚げた配属将校をもう一度上智大学へ送ってもらうよう懇請し、そのことは一般新聞には報道されたが、『日本カトリック新聞』はそうした事実も記事にしなかった。同年一二月、上智と陸軍省とのあいだに話し合いがようやく成立したあと、一二月三十一日、年末最終号は「上智・曉星の配属将校決定す」という見出しで、「十二月の陸軍定期異動は二十日午前発令されたが、それに伴い上智大学、曉星中学校へも左の如く軍事教育配属将校が配置された」と報道し、小出大佐と鍋島大尉の名前を公表した。『日本カトリック新聞』に対しては、問題が解決されるまで完全な嵌口令かんこうがしかかれていたわけで、その期間の空気の重苦しさは、いかばかりであっただろう。『上智大学五十年史』は、大学側の懇請にもかかわらず、配属将校の後任者が送られなかったために「卒業生は幹部候補生となる特典を失い、就職の門も狭められ、在学生のあいだにも動揺の色が濃かった」と報じて

いる。『五十年史』はそのあと「ついに本学と陸軍・文部両省とのあいだに、釈然たる諒解が成り立ち、無事解決された。すなわち一九三三年（昭和八年）十二月二十一日上智大学配属将校として第六十八連隊長陸軍歩兵大佐小出治雄氏の任命を見、ここに一年有余の陰鬱な雲霧は払拭することができた。」と記しているが、大学側、カトリック教会側の転向表明なしに陸軍省の釈然たる諒解など得られるはずはなかったと思われる。しかし当時日本には「知る権利」などという言葉はなかったし、物ごととは密室の中で進行し、新聞の読者は、事件が無事に解決したことだけを知らされたのである。

翌一九三四年一月一日、上智大学の講堂で配属将校の歓迎式が行なわれ、さいごにホフマン学長の発声で一同天皇陛下の万才を三唱し、ついで皇太子殿下の万才を三唱した。上智大学がつぶされる心配はもうなくなった。そう思ってほっとした表情をみせた人も多かったであろう。「どうでもいいことだ、考えぬこと。眠ること。考えても仕方がないこと。俺一人ではどうにもならぬ世の中なのだ。」そう思って憂うつな顔をした人も一人や二人はいたかも知れない。カトリック作家遠藤周作の小説の主人公が「考えぬこと、眠ること」とつぶやくのは戦争の末期であるが、日中戦争がはじまる三年も四年も前に、カトリックはそおつと踏絵を踏んでいたのである。プロテスタントはとてもだめだけれど、カトリックはことによつたらと思えたけれども、やはりだめだったのである。踏絵を踏んだと決まってしまうことに異論はあるだろうし、そして踏絵を踏んだと強いて言いはる必要もないといえはしない。しかし、一九三二年にはさしもの共産党の組織もがたにされてしまい、そのあと、プロテスタントとはちがって殉教の歴史をもつカトリック、信徒数は微々たるものであつても世界最大の組織の一環である日本カトリックが、ついに屈伏のやむなきにいたつたのであるから、私をも含めて、戦争反対、ファシズム反対の日本人は、「俺一人ではどうにもならぬ

世の中だ」と考えざるをえなくなるのである。

五 参拝拒否事件そのもの

『聖心の使徒』と題するカトリックの月刊雑誌は、一九七三年（昭和四八年）一月、上智大学創立六〇周年を記念して特集号を出した。その中に「靖国神社参拝拒否事件の発端を衝く」という文章が掲載されているが、筆者は事件当時、上智大予科二年の学生、現在には上智大教授の伊藤保である。別に「上智大学年輪」というページがあり、そこには、一九三二年五月五日、靖国神社参拝拒否事件、と記されており、伊藤も同じく五月五日の午後に事件が起ったとかいている。当日、配属将校の北原一視大佐は、六〇名ほどの予科二年生を校庭内に整列させ「本日は、満蒙・上海事変戦没者合祀のため行なわれる靖国神社大祭である。軍事教練の術科を取り止め遊就館を見学することにする。

……ただいまから出発」とさげんだ。伊藤の記述ではそうなっているが、靖国神社臨時大祭は三二年四月二十六日から二九日まで行なわれたのであって、そのことは当時の新聞を調べれば明白である。枝葉末節にわたるようであるが、事件の日がはっきりしないのでは因るので問題にするしだいであるが、私は、事件は五月五日に起きた「本日は靖国神社大祭である」と配属将校が言ったというのは、伊藤の思いちがいである、という風に解釈したい。

上智大学から靖国神社までは徒歩で二〇分、行進する学生の隊伍は、神社の石の鳥居を潜って正面の参道に出、青銅鑄造の第二の鳥居のところに来ると、拝殿が一陣の中に収まった。北原大佐はこの鳥居のそばで隊を解散させ、学生に対して「諸君は各自に参拝して、遊就館の前に集合せよ」と命じた。学生たちは三々五々拝殿の前へ進んで、最

敬礼をしてそれから遊就館に向かっていた。ところが、二人の学生、山本太郎と沖田英だけは、拜殿の前へ出ないで、右の遊就館の方へ平気で、(傍点和田)歩いていった。北原大佐はそれをじっと見ていた。当然とがめだてをすべきであったのにしなかった。伊藤はそのことに疑問をもち、北原大佐が、二人の不逞な学生の行動を材料にして上智大学当局を糾弾することを思いついた、という風に解釈している。

学生二人はともにカトリックの信者であった。山本は熱心な信者の家庭に育ち、沖田は上智大入学後ホフマン学長から公務要理を学び、事件の直前に洗礼を受けた。当時、教会が信者に神社、仏閣に参詣することを厳しく禁止していたことは確かだった。

伊藤保は右のように叙述しているが、私は最近同教授に直接お目にかかる機会を得、説明の補足をしてもらった。山本太郎が現在は故人であること、彼自身は熱心な信者ではなかったこと、唯一神への信仰をたらぬこうとして靖国神社参拝を拒否したのではなく、単なるエスケープだったと思うことなどを伊藤は語ってくれ、さらに、伊藤自身は広島の出身であること、カトリックの家庭環境に育ち、カトリックの教えに従って神社の前で頭をさげたりなど決してしなかったこと、そのため、まわりから特殊な目でみられていたこと、しかし大都市東京へ来てからは気分的に楽になったこと、配属将校から各自参拝せよといわれて、おとなしく頭をさげたことなどを語ってくれた。

上智大学は、ドイツ・イエズス会の経営する学校であり、学校当局は靖国問題について本国にドイツ文報告書を送っており、その中に「北原が出発前に校庭で学生たちに、その日の予定を述べたとき、神社参拝に疑念を抱いていた信者の学生が、折よく校庭を通りかかったホフマン学長に参拝をしても、差支えないかと尋ねた」という箇所があり、これに対して伊藤は「ドイツ文報告書中には、信者の学生が神社参拝の是非を校庭で聞いたと述べられているが、整

列を終わった小隊の列中から出て、通り合わせた学長のところへ行って参拝の許しをもらうことは、おそらくできなかったであろう」という見解を雑誌『聖心の使徒』の中でのべている。

また「配属将校は教練の時間に学生をつれて靖国神社参拝を強行した。……カトリック信者のうち……強制参拝を拒否したものがいたというので、憤激した将校は帰校して校庭を散歩中の学長の意見を求めた」という当時の上智大幹事丹羽孝三氏の証言があり、ドイツ報告書によると、北原大佐は事件の起った五日ではなく七日に、丹羽幹事同席のもとにホフマン学長と会談をしたが、彼は信仰上の立場に対する理解がすこぶる欠けていた、ということになっていて、こまかい点、デリケートな点、しかし重要な点で報告なり証言なりが互いにくいちがっているということもあるようである。

要するに二人の学生は、靖国神社の前で頭をさげたくないという軽い気持からか、それともさげないという強い信念にもとづいてか、今さら確かめようもないが、ともかくも参拝を忌避した。一九三二年五月は、このような些細なことがらが事件になりうる時期であって、配属将校は事件にした。ホフマン学長が信教の自由をどう考えていたか、上智大学の全学生のうち一割ぐらいがカトリック信者であったと伊藤教授は私に話してくれたが、非信者の学生の靖国神社参拝を学長が許さなかったかどうかの一つの問題である。信者の学生が、学長に向かって参拝してよろしいでしょうかとたずねたとしたら、学長はよろしいとは言わなかったと思うが、正確なことはわからない。しかし、上智大学の学生は信者、非信者の別なく参拝すべきであるという明白な態度を始めからとっていたら、事件にはならなかったであろうし、学長が煮えきらなかったから、すくなくとも信者学生の参拝は好ましくないという立場だったから問題はこじれたと思わざるをえない。当の山本、沖田両学生は、学長からも北原大佐からも「咎められることはなかつ

た」と伊藤もかいており、配属将校ないし陸軍省は、カトリック大学が教育方針を日本精神に合わせるか合わせないかだけに焦点をしぼっていたのである。

六 全日本教区長の共同教書

一九三二年、三三年、三四年、三五年当時の『日本カトリック新聞』を一ページ一ページくっていくと、日本精神、軍国主義の側からの攻撃、圧力、脅迫を受けながら、苦しい防衛戦をつづけていたことがよくわかる。三二年一月二〇日の「国際平和とカトリシズム」という題の社説をよむと

「……カトリシズムは、国際平和裡に於ては、中正の道を辿る平和主義者である。然し既に数度に亘つて言明したる如く、我等カトリックは必要にして他に方法なき場合には、正しき戦争を是認し、又ある特別なる場合には、国の主権者は戦争する権利のみならず、義務をも有すると言明して憚らぬものである。」

カトリックは、正しい戦争なら是認する、そういうことを口にせずにはいられなくするような空気がカトリック教会のまわりをとりかこんでいたのである。「カトリック宣教師は帝国主義の走狗か 奇怪極まるスパイ呼わり」そういう見出しをかかけて、カトリック宣教師は帝国主義の走狗ではないことを力説せねばならなかったし、「カトリックは愛国者でありえぬか」という見出しをかかけて、カトリックは立派に愛国者たりうることを証明する記事をながながと書かねばならなかった。カトリックの信者で万朝報の記者であった岡延右衛門は、日本のえらい人から「あなたは伊太利と日本と戦争したら、どちらへつきますか」と質問されて哑然とし、知識階級のうちにもこういう程度の

人は決して少なしとしない、と言つて嘆きながら、「非常時とカトリック」という一文を月刊誌『カトリック』にのせ、日本人の無知と誤解に対する受身のたたかひを行なつてゐる。

「カトリックほど 皇室のために祈り、国家のために祈り、すべての支配者のために祈るものが、いづこにあらうか。げにカトリックは真の意味に於ける最高の愛国者であり、秩序の維持者である。真のカトリックの精神の生きているところに、何の面倒も起り得ず、争いも起り得ない。ところがカトリックに対して無智識の者、随つてこれを誤解する者はカトリックに対して、あられもせぬ、れぎぬを着せるのである。

その見当違いのカトリック観による『非常時』の掛声を背景とした圧力に、カトリックは、やゝもすれば押され氣味ではなからうか。それがためにカトリックは萎縮してゐるのではなからうか。」

悲痛といおうか、悲惨といおうか、カトリック・ジャーナリスト岡延右衛門は、このような叫びを一九三四年二月にあげたのであるが、翌三五年（昭和一〇年）四月二十五日、全日本カトリック教会の司教、教区長一三名は東京大司教館に相会して、全日本教区長の「共同教書」なるものを作製発表した。駐日ローマ教皇使節 大司教パウロ・マレラほか東京大司教アレキシス・シャンボン、大阪、長崎、福岡、札幌、広島島の教区長司教、名古屋、鹿児島、宮崎、新潟の教区長、函館管理、四国教区管理が名を連ね「信愛なる信徒諸君、今や、我が大日本帝国は、未曾有の非常時局に直面し……」と呼びかけたのであるが、一三名中、長崎司教早坂久之助ひとりをのぞいて、あと全部が外国人であることに、われわれは先ず驚きを感じる。さらに外国人一二名が口をそろえて「今や、我が大日本帝国は」と言つてゐるのであるから、驚きはいつそう強くならざるをえない。

「共同教書」中には言いわけがしてあつて「外人宣教師は我が国の土と化すべき決意を以て立働きつつあるのであ

りますが故に、大日本帝国民と異らぬと言ひ得べく、内外人の区別は全く無いのであります」と書かれているが、日本人のカトリック教徒は、当時このような主張に疑いを感じなかつたのであろうか。

教書の中の重要な一節を次に引用する。

「されば、諸子が夙に行ひ来れる処とはいへ、尚一層諸事に細心の注意を払い、殊に愛国の至情を疑はるゝが如きことなからんことを期せらるゝやう衷心より冀望[★]して止まないものであります。之に關しては既に纒々[●]陳べし国民の義務を忠実に果すに、心を尽し、意を尽すのは勿論、国祭日、其の他の祝祭日に際して国旗掲揚の美風の如きには他に先んじて之を奨励し、在郷軍人会、青年団に対する務を的確に遂行し、出征軍人、又は、壮丁の入退宮の送迎、或いは戦没者に対する式典等には、其の土地の風習に順応して国民的感謝と儀礼とを表すやう務め、公民教育の実を挙げ、且、児童の教育に大いに力を致すやう従来に倍して留意し、其の他凡ゆる機会に適當なる方法を以て進んで愛国心と忠誠とを現すことを、銳意之努むべきであります。」

「建国以来国民精神の中におのずから含まれている皇室中心主義の精華を天壤^{じやう}と俱に窮まりなく、いよいよ輝きわたらしむるやう振起作興を期すべきものであります。」

教書の全文は『日本カトリック新聞』一九三五年五月一二号に一ページ全体を使用して掲載されたが、字数六〇〇〇字弱、四百字詰原稿紙にして一五枚の長文で、その中で「忠君愛国」という言葉が、何回くり返されていることだらう。神社参拝をしないために、一方では非国民扱いされる苦痛を味わい、他方ではカトリック信者としての誇りをもってきたものが、「共同教書」の発せられるとともに、神社参拝をすることを「訓奨」されたのであるから、一〇万の信者は表面従順を示したとはいえ、内心は果してどうだったのであろう。

まわりからは当然のことながら「カトリックは転向した」という声が上がってきた。雑誌『カトリック』六月号の巻頭言は、転向という言葉に反発して次のようにのべている。

「カトリック教義の内容を認識していないものの中には、最近の日本のカトリック教会の態度を目して、百八十度の転向をなしたるもの如く論難するものさへ見出されるに至った。勿論かかる皮相的な批判は一笑に附すべきと同時に大いに同情に価するものと云わねばならない。過般発布せられた全日本教区長の『共同教書』に明示せられている忠君愛国の思想と実践とは、カトリック教会が大古から常に伝統的に教へ来たところであり、今日に至って創意したるものでは絶対にはないものである。」

良心のやましさを感ぜず、冷静に、世間の批判に対して答えたとはとうてい思えないが、共同教書のおかげで、カトリック教徒の血が流れるということがなくてすんだのは、さいわいといえばさいわいであった。しかしカトリックはこの時期に何か大切なものを失ったはずである。

七 どのような反省が？

戦後、カトリック教会の指導者、一般平信徒が戦時下の生き方をどのように見直しているか、を知りたいと思つて、三冊の本（いずれも新書版）に目を通した。

『戦争と宗教』（信友社刊）の著者荻原晃は、一九四〇年から五〇年まで、カトリック教会広島教区の教区長をつとめていた人である。荻原は、四三年（昭和一八年）八月、カトリック司祭としての宗教宣撫の任を帯びて、南方に、

教会と海軍省両方から派遣された。出発の直後、広島の警察官は、彼をスパイ容疑者として連行するつもりで教区長館を襲ったが、もぬけのからだだった。二年後、広島に原爆が落された時、彼はジャワのストラバヤに滞在していて命を助かった。「神の愛の大きな御手が、私を死の危険から救いたもうたもの」と彼は戦後考えつつづけている。南方の島々、いたる所にカトリックの信者がいて彼は歓迎された。「祝福の多い旅」はつづけられた。彼は、思う存分伝道ができたと書いている。無事に祖国へ帰ってきて、『戦争と宗教』執筆にあたっては次のようにあとがきでのべている。

「当時は、キリスト教は日本国民から好感をもたれなかったというよりは、むしろ色々な意味において誤解され、かつ危険視され、われわれ日本人司祭の活動も局限されついに私はスパイ容疑者としてブラックリストにのせられ、警察官たちから常に尾行されるようになった。

しかし今でもそうであるが、その当時も、私は彼等を憎んだり、軽べつなどはしていなかった。要するに彼等はキリスト教を知らなかったので、われわれを誤解していたのである。」

戦時下のキリスト教の問題を、誤解されていたということ片付けているので、私に言わせれば、話にも何にもならない。

『カトリックと日本人』（講談社現代新書）の著者坂本堯は、終戦をソウルで迎え、その直後、北朝鮮でソ連占領下での同胞の悲劇を体験する。本の中には「平和の問題」という項目もあるが、私の期待していたような反省はひとかけらも見い出すことができなかった。

稲垣良典著『現代カトリシジムの思想』（岩波新書）ここには戦争の論理、平和の論理が語られているが、具体的な第二次世界大戦に関しては、ひとことも語られていないので、私はまたしても失望させられた。プロテスタント側の

『キリスト教の戦争責任』、『戦争責任と戦後責任』（渡辺信夫著）、『あるキリスト者の戦争体験』、これに類する書物が、カトリックにはあるのかなのか、私はもうすこし努力をして調べてみたい。

（文中、ご好意を示された伊藤保教授ほか、すべての方がたに対する敬称を略した。）